

# 都市計画 Who was Who (29)

## チャールズ・A・ビアード

(Charles Austin Beard)

磯村 英一

(東京都立大学名誉教授)

アメリカ、インディアナ州、ナイツタウン生まれ、18歳の時から当地の“ナイツタウン・サン”という週刊紙を経営した。その後ディポー大学に入学、当初は労働問題・社会問題に興味を持ち、1898年卒業後、渡英してケンブリッジ・オックスフォード両大学に学ぶ。1899年帰国後、コーネル大学講師となり、再度渡英してオックスフォード大学の講師、帰米後はコロンビア大学で学位（PHP）を得。この間専門は、歴史学から政治・経済学に及び、その多方面の接触が持前の科学的調査研究法を背景に都市問題・都市政策への関心の集約に至る。

1917年4月、アメリカが、欧州大戦に参加の是非をめぐって、当時在職していたコロンビア大学の総長と意見を異にし退職する。先輩や校友たちはその辞職をおしんで翻意を求めたが応ぜず、ニューヨーク市政調査会（New York Institute for Municipal Research 1906年創立）の専務理事となる。

東京市政調査会の初代会長だった後藤新平は、その会の発展・指導のためにビアード博士を大正11年10月に招き、翌12年3月の帰国まで、東京はもちろん全国の大学や地方自治体をめぐって講演指導を行い、都市問題といえば“ビアード”といわれるくらいに知られることになる。

たまたまその帰国後半年、東京市は、関東大震災によって壊滅に近い状態となる。市政調査会の会長と同時に“震災内閣”といわれた山本権平内閣の内務大臣になっていた後藤新平は、災害発生5日目にニューヨークのビアード所長に打電し、東京復興のための再来日を求めた。ところがその電報とは行きがちがいに、ビアード氏は後藤会長当てに次のように“打電”している。

“新道路線を決定せよ。路線内の建物の再建を禁止せよ。鉄道の停車場を統一せよ”といった趣旨。

現在東京で“昭和通り”などという名称で、下町道路の幹線となっているのが、その指示の一端である。いかにビアード氏が“計画者”として、自分が手をかけ指導した都市、その計画に対して情熱と責任をもっていかは、この一事が物語っている。

ビアード氏は、単に、講演や指導の役割を果たしただけでなく、幾多の論文・著書を残している。そのうちで、最も有名なのは“東京市政論”。これは彼が日本滞在中に、招きを受けた後藤会長に提出した“A Report on the Government and Administration of the City of Tokyo”という膨大な調査報告書の集約である。それが翻訳されて“東京市政論”として東京市政調査会から出版され、東京市・都政を研究するものにとっては不朽の指導書として論議されている。しかもこの報告書は、ニューヨークでも刊行さ



れ “The Administration and Politics of Tokyo, A Survey and Opinions” がその題名。アメリカの都市政策との比較にも言及され、その国でも今日では日本都市研究の重要な参考となっている。

彼は、アメリカに生まれながら、英国を始めヨーロッパの各国を訪れ、その大学で指導をしたばかりでなくその “都市論” のなかには、かなりヨーロッパ的な思想を受けている。それは一言でいえば “古いものを尊重する” ということである。英国の都市計画といえば、ホワードの “田園都市論” が有名だが、彼は日本の “都市災害” の再建に、 “新しい路線を計画しろ” ということを打電したなかには、イギリスでまちづくりのキーワードとして知られている “Old trees in New Town” という言葉の裏返しが見られる。古いものと新しいものとの “調和” が彼の都市づくりの哲学だったのではないかと思われる。それは彼がアメリカ国内で友人達と調査し刊行した次のような著書をもみても判る。

“Clarence E. Ridly and Herbert A. Simon, Measuring Municipal Activities. A Survey of Suggested Criteria of Appraising Administration, 1943”

“Lent D. Upson, The Government of Cincinnati and Hamilton County, 1944”

ピアードの研究は “計量都市学” 的な面の兆しがみられる。もし彼が現在在命すれば、コンピューター時代にどのような研究方法や結果が指示できるか、極めて興味がある。